

1 指数対数・三角関数

1.1 [1] 指数対数

a, b は $ab = \frac{1}{4}, a < b$ を満たす正の数とする. x の関数

$$h(x) = (\log_2 \frac{x}{a})(\log_2 \frac{b}{x}) \quad (x > 0)$$

の最大値が $\frac{9}{4}$ となるような a, b を求めていく. $ab = \frac{1}{4}$ の両辺に対し, 2 を底とする対数をとると

$$\log_2 a + \log_2 b = \boxed{\text{アイ}} \quad (1)$$

であるから, $x > 0$ のとき, $X = \log_2 x$ とおくと $h(x) = \boxed{\text{ウ}}X^2 - \boxed{\text{エ}}X - (\log_2 a)(\log_2 b)$ となる.

したがって、 $h(x)$ の最大値が $\frac{9}{4}$ のとき

$$(\log_2 a)(\log_2 b) = \frac{\boxed{\text{オカ}}}{\boxed{\text{キ}}} \quad (2)$$

である。 $0 < a < b$ と (1),(2) より、 $a = \sqrt{\frac{\boxed{\text{ク}}}{\boxed{\text{ケ}}}}$ 、 $b = \sqrt{\boxed{\text{コ}}}$ と求められる。

1.2 [2] 三角関数

座標平面上で、原点 O を中心とする半径 1 の円の円周上に点 $P(\cos \theta, \sin \theta)$ をとる。ただし、 $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ とする。また、点 P を通り x 軸に垂直な直線と x 軸の交点を H とする。さらに、第 4 象限に点 A を、三角形 OAH が正三角形となるようにとる。

(1) $\theta = \frac{\pi}{6}$ のとき、 $PH = \frac{\text{ア}}{\text{イ}}$ であり、四角形 $OAHP$ の周の長さは $\frac{\text{ウ}}{\text{エ}} + \sqrt{\text{オ}}$ である。

(2) $\angle AOP = \theta + \frac{\pi}{カ}$ である．三角形 OAP の面積を S とする． $S = \frac{キ}{ク} \cos \theta \sin(\theta + \frac{\pi}{カ})$ であり，

加法定理を用いると， $S = \frac{ケ}{コ} (\sin \theta \cos \theta + \sqrt{\frac{サ}{タ}} \cos^2 \theta)$ と変形でき，

$$S = \frac{シ}{ス} \sin(2\theta + \frac{\pi}{セ}) + \sqrt{\frac{ソ}{タ}}$$

と変形できるため， θ の範囲に注意すると， $\theta = \frac{\pi}{チツ}$ において S は最大になる．

(3) $p > 0$ で， x の関数 $f(x) = \frac{シ}{ス} \sin(px + \frac{\pi}{セ}) + \sqrt{\frac{ソ}{タ}}$ とする．そこで， $f(x)$ の周期が正で

2 番目に小さいものが 3π となるのは $p = \frac{テ}{ト}$ である．

2 微分積分

$a \neq 0$ の実数とする．関数 $f(x)$ を $f(x) = ax^3 - 3(a^2 + 1)x^2 + 12ax$ とする． $f(x)$ の導関数は、

$$f'(x) = \boxed{\text{ア}} \{ ax^2 - \boxed{\text{イ}} (a^2 + 1)x + \boxed{\text{ウ}} a \}$$

であるから、関数が極値を持たないような a の値は、 $\boxed{\text{エ}}$ 、 $\boxed{\text{オカ}}$ である．ここで、 $a = \boxed{\text{エ}}$ のときの曲線を $C: y = f(x)$ とする．

原点における曲線 C の接線 l の傾きは $\boxed{\text{キク}}$ である。接線 l と平行な直線のうち、原点以外の点 P で C と接する直線 m を考える。 C と m の接点 P の座標は $P(\boxed{\text{ケ}}, \boxed{\text{コサ}})$ であり、直線 m の方程式は

$$y = \boxed{\text{キク}}x - \boxed{\text{シス}}$$

である。さらに、 C と m の共有点のうち P でない方を Q とすると、点 Q の座標は $(\boxed{\text{セソ}}, \boxed{\text{タチツ}})$ である。

次に、3点 O, P, Q を通る放物線 D を考える。

$$y = \boxed{\text{テト}}x^2 + \boxed{\text{ナニ}}x$$

である。ここで、 D と m で囲まれた領域を E とする。さらに、 t は、 $\boxed{\text{セソ}} < t < \boxed{\text{ケ}}$ を満たす実数とし、領域 E において

$x \leq t$ を満たす部分の面積 S

$x \geq t$ を満たす部分の面積を T

とする。このとき $S + T = \boxed{\text{ヌネノ}}$ であり、 $S = T$ を満たす t の値は $\boxed{\text{ハ}}$ である。

3 数列

等差数列 $\{a_n\}$ は, $a_3 = 5, a_6 = 11$ の時の一般項は

$$a_n = \boxed{\text{ア}}n - \boxed{\text{イ}} \quad (3)$$

であり

$$\sum_{k=1}^n ka_k = \frac{\boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}}n(n + \boxed{\text{オ}})(\boxed{\text{カ}}n - \boxed{\text{キ}}) \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

また, 数列 $\{b_n\}$ は

$$\sum_{k=1}^n b_k = 2^n + n - 1 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

を満たしている. このとき $b_1 = \boxed{\text{ク}}$ である. さらに, 数列 $\{b_n\}$ の一般項は

$$b_n = \boxed{\text{ケ}}^{n-1} + \boxed{\text{コ}}$$

数列 $\{c_n\}$ を

$$c_n = \begin{cases} a_n & (n = 2k - 1) \\ b_n & (n = 2k) \end{cases} \quad (4)$$

で定める．また

$$S_n = \sum_{k=1}^n c_k \\ (n = 1, 2, 3, \dots)$$

とする．

$$a_{2n-1} = \boxed{\text{サ}} n - \boxed{\text{シ}} \quad (n = 1, 2, 3, \dots) \\ b_{2n} = \frac{\boxed{\text{ス}}}{\boxed{\text{セ}}} \boxed{\text{ソ}}^n + \boxed{\text{タ}} \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

であるから

$$\sum_{k=1}^m = \boxed{\text{チ}} m \boxed{\text{ツ}} - m \quad (m = 1, 2, 3, \dots) \\ \sum_{k=1}^m = \frac{\boxed{\text{テ}}}{\boxed{\text{ト}}} (\boxed{\text{ナ}}^m - 1) + m \quad (m = 1, 2, 3, \dots)$$

である．したがって，末項が $n = 2k$ のときの数列 c_n を考えると

$$S_n = \frac{\boxed{\text{ニ}}}{\boxed{\text{又}}} (\boxed{\text{ネ}}^n - 1) + \frac{\boxed{\text{ノ}}}{\boxed{\text{ハ}}} n^2 \quad (5)$$

である．また， $S_n < 1000$ を満たす最大の自然数 n は $\boxed{\text{ヒフ}}$ である．

4 ベクトル

O を原点とする座標空間における 4 点を $A(2,3,-1), B(3,5,2), C(-2,3,3), D(1,5,4)$ とする . このとき

$$\overrightarrow{AB} = (\boxed{\text{ア}}, \boxed{\text{イ}}, \boxed{\text{ウ}})$$

$$\overrightarrow{CD} = (\boxed{\text{エ}}, \boxed{\text{オ}}, \boxed{\text{カ}})$$

である . したがって , $|\overrightarrow{AB}| = \sqrt{\boxed{\text{キク}}}$, で , ベクトル AB とベクトル CD の内積は $\boxed{\text{ケコ}}$ であり , ふたつのベクトルのなす角を θ とすると ,

$$\cos \theta = \frac{\boxed{\text{サ}}}{\boxed{\text{シ}}}$$

(6)

である . 直線 AB 上に点 E , 直線 CD 上に点 F をとると , $\overrightarrow{OE}, \overrightarrow{OF}$ を実数 s, t を用いて , それぞれ

$\overrightarrow{OE} = \overrightarrow{OA} + s\overrightarrow{AB}$ $\overrightarrow{OF} = \overrightarrow{OC} + t\overrightarrow{CD}$ と表される . ここで , 直線 AB と直線 CD の交点を P とすると , 点 P の座標は $(\boxed{\text{ス}}, \boxed{\text{セ}}, \boxed{\text{ソ}})$ であり , 三角形 BDP の面積は $\boxed{\text{タ}}\sqrt{\boxed{\text{チ}}}$ である .

また, $\overrightarrow{AB}, \overrightarrow{CD}$ の両方に垂直で, Z 成分が正である大きさ $\sqrt{6}$ のベクトルを \vec{n} とすると, $\vec{n} = (\boxed{\text{ツ}}, \boxed{\text{テト}}, \boxed{\text{ナ}})$ である. 次に, $\overrightarrow{PQ} = \overrightarrow{PA} + \overrightarrow{PC} + \vec{n}$ となる点 Q を考える. また, 線分 BD の中点を M とすると $\overrightarrow{PM} = \frac{\boxed{\text{ニ}}}{\boxed{\text{ヌ}}}(\overrightarrow{PA}, \overrightarrow{PC})$ である. よって, 点 M を通り \vec{n} に平行な直線と直線 PQ の交点を R とすると, 四面体 $BDPR$ の体積は $\boxed{\text{ネ}}$ である.

5 終わりに

この問題はマーク式総合問題集 数学 II・B 2013 (河合塾シリーズ) を参考にさせて頂きました。心より感謝いたします。ありがとうございます。